様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　６ 日現在

機関番号：３４６０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ１２５１８

研究課題名（和文）屋久島における狩猟コンフリクト解消と狩猟文化の再生

研究課題名（英文）Resolution of Hunting Conflicts and Regeneration of Hunting Culture in Yakushima

研究代表者
服部　志帆（Hattori, Shiho）

天理大学・国際学部・准教授

研究者番号：５０５１２２３２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、屋久島における狩猟活動の変遷を、島内外の野生動物に対する需要、開発政策、世界自然遺産、環境政策、ジビエブームとの関わりのなかで明らかにし、屋久島の人々が狩猟文化と世界遺産をともに維持できるような方策の検討を行った。屋久島では、1920～1960年ごろにかけて島外からの経済的需要を受けて「伝統的狩猟」が活発に行われていた。その後、伐採地の拡大がおこなわれたあと環境政策と野生動物保護が活発化したことによって、野生動物が増加した。食害が大きくなり狩猟の生態系保全機能が重要視されるなか、文化的社会的価値の理解が必要であることを狩猟活動の変遷から指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、世界遺産である屋久島において野生動物の持続的利用と住民の文化の両立という観点から実施した。これまで自然保護および野生動物保護は西欧の保護思想の影響を受け、日本においても住民の活動を排除する形ですすめられてきた。しかしこのことが、過度な規制が動物の増加を促し、生態系のバランスを損なうことが世界各地で報告されるようになってきている。生態系の管理のために狩猟が重要な役割を果たすことを理解するとともに、狩猟をおこなってきた住民の文化や社会についても理解をすすめ、環境持続的で文化的に適切な形の世界遺産管理が求められていることを本研究では指摘した。

研究成果の概要（英文）：This study clarified the changes in hunting activities in Yakushima in relation to demand for wild animals inside and outside the island, development policies, world natural heritage sites, environmental policies, and game booms. I examined measures to maintain the world natural heritage and hunting culture in Yakushima. "Traditional hunting" was actively practiced from 1920 to 1960 due to economic demand from outside the island. The number of wild animals increased due to the activation of environmental policies and wildlife protection after the expansion of logging activity. From the point of view of changes in hunting activities, I pointed out the need to understand the cultural and social value of hunting in the community of Yakushima.

研究分野：地域研究

キーワード：屋久島　伝統的狩猟　世界遺産　猟師　持続的利用

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

屋久島は 1993 年に日本ではじめて世界自然遺産に登録された。登録の主な理由は樹齢 1000 年をこえる屋久杉が美しい自然景観を生み出していることと、亜熱帯から亜寒帯までの植物が海岸線から山頂へと連続的に続く「植物の垂直分布」がみられることである。しかし 90 年代後半から、シカが急激に増加し食害によって希少な植物が次々と姿を消している。シカやサルによる農作物被害も深刻である。

屋久島では 2009 年頃から、シカやサルによる生態系や農作物への被害対策が急務となっており、有害駆除が積極的に実施されている。全国的な農業被害対策の動きと連動し、2010 年から捕獲動物一頭ごとに報奨金がおりるようになり、2015 年からは報奨金が高額化した。民有地における罠猟の規制が緩和されたこともあり、有害駆除を目的にした罠猟が活発になり、狩猟地や動物資源をめぐるコンフリクトが猟師の間でみられるようになった。猟友会における人間関係の悪化はリクリエーションを目的に行われていた集団猟を減少させている。また罠の高密度化による猟犬の負傷（罠に足がかかり切断される）が頻繁に起こるようになり、島固有の屋久島犬を用いた集団猟が行われなくなっている。

一方、屋久島の国有林や世界遺産登録地域における生態系管理に狩猟が有効であるか否かという問題について、研究者や行政の間で議論が続いている。動物や狩猟に対する深い知識を持つにもかかわらず、猟師たちはこの議論の蚊帳の外におかれている。一部の猟師が行政からの依頼で、計画に従った捕獲を行うのみである。

このように、環境政策の一環で行われている有害駆除が、これまで屋久島において行われてきた狩猟活動に変化をもたらしている。このままでは、屋久島の猟師は世界遺産の生態系保全や全国的な農業被害対策の流れにまきこまれ（一方では、利用しながら）、狩猟文化は消滅する危機に瀕している。

２．研究の目的

本研究の目的は、以下の 3 点である。①屋久島における狩猟活動の変遷を、島内外の野生動物に対する需要、開発政策、世界自然遺産、環境政策、ジビエブームとの関わりのなかで明らかにする。②近年、猟友会のなかでみられるようになったコンフリクトに着目し、要因と解決策を検討する。③猟友会の若い世代が開始したジビエ販売や屋久犬の育成などの新しい動きに着目し、狩猟文化の継続を可能にする条件を検討する。④これらをもとに、環境政策やジビエブームと併存しながら、屋久島の人々が狩猟文化と世界遺産をともに維持できるような方策の検討を行う。

３．研究の方法

①　屋久島における狩猟史

狩猟活動に大きな影響を与えたと考えられる経済的需要や開発・環境政策の変化に注目しながら、時期ごとに分析を行う。変容に関する全体的な流れは、これまで猟師を対象に行ってきた聞き取りと猟友会や行政組織から得た資料、霊長類学者の未発表フィールドノート（1950 年代の猟師に聞き取りを行い、当時の狩猟活動と民俗知識を調査したもの）から掴んでいた。世代・集落・経歴ごとの分析を行い、時代変遷をたどれるように、多様な猟師の聞き取り調査を実施した。また、1950 年代以前の歴史資料については鹿児島の資料館に問い合わせ、野生動物の取引について

【1　研究目的、研究方法など（つづき）】

は、取引が行われた動物園や研究施設に問い合わせた。

② 有害駆除政策に起因するコンフリクトの要因と解決策

コンフリクトの実態については、猟師が多い宮之浦において、猟師が罠をかけている位置を GPS で記録するとともに聞き取りから、コンフリクトの実態を検討した。

③ 若い世代の猟師による新たな取り組み

宮之浦地区において、2014 年にオープンしたシカの解体施設・販売所「ヤクニク屋」と、安房地区で 2018 年にオープンした「屋久島ジビエ加工センター」を対象に、起業のきっかけや現在の営業状況について調査した。また、安房地区で 2017 年にオープンした非営利レストラン「ハンターズショップ　ちいぞう」を運営している若手猟師の活動状況について調査を行った。

④ 狩猟文化と世界遺産を維持できるような方策

上記の調査（①～③）をもとに、現在猟師が抱えているコンフリクトをなくし、屋久島において狩猟文化と世界遺産がともに維持されるような政治的、経済的、社会的環境を検討した。

４．研究成果

①について、屋久島では、1920～1960 年ごろにかけて島外からの経済的需要を受けて「伝統的狩猟」が活発に行われていた。当時、猟師は動物園や実験用に高価格で販売されるサルを中心に野生動物の取引を行い、狩猟は猟師にとって重要な生計手段となっていたことがわかった。また一方でこのことが集落において妬みの対象となり差別や陰口の対象となることもあった。そのようななか、猟師は獣害に対応するなどの社会的要請にこたえながら、集落において受容される道を探っていた。このような成果については、2021 年に出版した『霊長類学者川村俊蔵のフォールドノート―1950 年代屋久島の猟師と後継者たち―』において記している。

②については、猟師は罠をかける場所を互いに調整しながらコンフリクトを避けようとする一方で、多くの動物を捕獲し補助金を獲得する猟師に対して複雑な心境を抱えていた。野生動物の増加により有害捕獲された動物には補助金が出ることになったことが、猟師間で新たな対立の芽となっており、これまで人的交流を主軸にすえて行われてきた猟友会活動が変化しつつあることがわかった。

③について、調査期間はコロナ禍であったため、屋久島においては観光客が激減した時期であった。そのため、宮之浦と安房のジビエ販売所、レストランは獣肉およびこれを用いた料理の販売に苦戦していたが、ネットを活用するなどし、消費者の獲得を行っていた。これまで観光客だのみであったことから、コロナが収束し始めたころからは、シカ肉食を住民の間ですすめようと夏休みにイベントを開始した。野生動物の活用や狩猟の生態学的意味に関する環境教育として、ジビエ販売所やレストランは社会的意義を有するものであるが、経済的観点から課題を抱えていた。

④について、猟師のコンフリクトは補助金など環境政策が起こしていることから、持続的な環境利用という観点からだけでなく、持続的な狩猟コミュニティのあり方という観点からも検討すべきであることを指摘した。また新たにみられるようになったジビエの活用については、観光客だけでなく地域における活用がすすむ仕組みを創り出していく必要がある。過去 100 年の間に屋久島における狩猟の意義は政治的経済的な影響を受けて大きく変わり、猟師は狩猟形態やコミュ

【1　研究目的、研究方法など（つづき）】

ニティの形を変えながら狩猟活動を維持してきた。しかし、コンフリクトや経済性の問題だけでなく、高齢化による猟師の減少という問題も抱えており、他の地域同様に猟師の獲得が困難になりつつある。野生動物の管理を行う猟師がいなくなるということは、生態系への影響もさることながら、地域において形成されてきた文化が失われるということである。狩猟活動の継承は、コミュニティや生態系における歴史的な役割を住民や行政と共有していけるかにかかっている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 服部志帆	４．巻 6
２．論文標題 「川村・伊谷の1950年代の屋久島のニホンザル調査」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『屋久島学』	６．最初と最後の頁 71-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 服部志帆
２．発表標題 「1950年代屋久島の猟師はどのような人びとであったかー後継者の語る1950年代の屋久島と野生動物ー」
３．学会等名 第9回屋久島学ソサエティ研究大会、オンライン開催
４．発表年 2021年

１．発表者名 服部志帆・小泉都
２．発表標題 「ヤクシマザルに関する猟師の民俗知識ー川村俊蔵博士による1950年代前半の聞き取りからー」
３．学会等名 第36回日本霊長類学会研究大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 服部志帆・小泉都
２．発表標題 「1950年代屋久島における野生動物と猟師の関係;川村俊蔵博士の野帳分析からわかったこと」
３．学会等名 第８回屋久島学ソサエティ研究大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 服部志帆・小泉都
２．発表標題 「野生動物に関する猟師の民俗知識：霊長類学者による 1950 年代屋久島の調査より」
３．学会等名 第26回生態人類学会研究大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 服部志帆
２．発表標題 「屋久島における牢屋罠とその保存の必要性」
３．学会等名 屋久島学ソサエティ第7回大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 服部志帆	４．発行年 2021年
２．出版社 南方新社	５．総ページ数 389
３．書名 霊長類学者・川村俊蔵のフィールドノート―1950年代屋久島の猟師と後継者たち	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関